（東日本大震災・原子力災害伝承館）

展示から創造へ：震災伝承の認識論モデルの考察と提案

東日本大震災・原子力災害伝承館　常任研究員　山田 修司

概要　「経験していない人にはわからない」。一見すると正しく思えるこの主張はしかし、「他者」への「拒絶」を意味するのだろうか。あるいは大きな物語りへの迎合をせまるのだろうか。訪れ、留まり、語り、鑑賞する。これらによって生じる「経験」とその展示空間の「場所」に注目したとき、震災伝承という営みを、伝達に限られない、ある種の創造と意味づけるモデルを提示する。そこでは場所への関わりの仕掛けが重要であり、課題となることが指摘される。

Keyword　震災伝承　認識論　場所　語り　真正性　公共性

■ 背景と問題

1）震災伝承の場：
（過去完了の）被災地や震災伝承施設

2）経験していない人にはわからない：
被災の経験とは？

3）ハコモノ批判：
官製の物語りというネガティブな評価

■ 提案

「素朴な伝達」モデル
（or 逆転した「何でもあり」モデル）

（ゆらぎ）

経験の生成する場所
〈展示から創造へ〉

■ 考察と課題

1）知覚的な識別（不）可能性

・放射線：目で見えない、耳に聞こえない

・原子力災害：長期かつ広範囲にわたる「避難」
＝日常と非日常の境界の曖昧さ

・経験の私秘性：わたしの経験はわたしにしか
わからない（？）

← **対象への「アクセス」の問題**を提起

2）被災経験の質的な差異

・一次的：ハザードとの経験
→ 被災者に基盤

・二次的：震災伝承への参加＝記憶実践
→ 被災者・非被災者の集まる
場所に基盤

← **真正性へのアクセス**を保証

◎展示から創造の可能性へ

・「与えられる」文脈：
→ 正当化の可能性

・生産ではなく創造：
→ 社会化される知識
地域価値の（再）認識

・展示＝「語られる物語り」の公共への開かれ

継　承

教　訓

復興知

●仕掛けと課題

・仕掛け：観客性の政治学
→ 気づきをもたらす展示構成、
研修プログラム、……

・課題① 語りの「委任」：言葉、モノ、ヒト
→ 正統性の問題

・課題② 客観的な指標（尺度・モデル）の構築

注：
[1] 本稿の内容は報告者個人の見解であり、報告者が所属する組織の公式見解を示すものではない。
[2] 本研究は令和４年度および令和５年度の「東日本大震災・原子力災害伝承館個人研究費」、「令和４年度（公財）上廣倫理財団研究助成」（採択課題：道徳の物質的転回による設計論の構築に向けた技術哲学的考察）の補助を受けている。

主な参考文献：
[1] クレア・ビショップ〔2012〕（2016）『人工地獄』大森俊克訳、フィルムアート社
[2] 深谷直弘（2019）「福島第一原発事故と東日本大震災の記憶を残す活動：資料調査・収集現場における空間の考察」『社会志林』、66巻3号、法政大学社会学部学会、75-88
[3] 光岡寿郎（2017）『変貌するミュージアムコミニュケーション』せりか書房
[4] 山田修司（2023）「震災伝承施設における資料化とその概念的検討」『日本都市学会年報』56巻（近刊）
[5] Walton, K. L. (1970). “Categories of Art,” *The Philosophical Review*, 79-3: 334-367. [森功次訳（2015）電子出版物、https://note.mu/morinorihide/n/ned715fd23434]

連絡先：　山田修司（s.yamada@fipo.or.jp）